氏　　名	王　則堯
学　　位	博士（日本言語文化学）
学位記番号	甲第168号
学位授与年月日	2021年3月22日
審査研究科	外国語学研究科
論文題目	日本語・満洲語・漢語の言語接触の研究―オノマトペを中心に―
論文審査委員	（主査）大東文化大学教授　須田　義治
	（副査）大東文化大学教授　福盛　貴弘
	（副査）大東文化大学教授　田口　悦男
	（副査）大東文化大学名誉教授　寺村　政男
	（副査）東京都立大学准教授　荒木　典子

博士論文　審査報告

1．本人の履歴、研究の経緯、および学術業績

この部分に掲載されている内容については、論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨に関する箇所では無い為、加工がされております。ご了承ください。

2．王氏『日本語・満洲語・漢語の言語接触の研究―オノマトペを中心に―』の要旨およびその特色

本論文は、おもに寺村(2007)で研究されている「東アジアにおける言語接触」という観点から、日本語・満洲語・漢語のオノマトペについて考察したものである。地政学的に見ても、日本は古代から周辺諸国からさまざまな言語の流入や文化の影響を受け、自らの言語や文化を育んできたと考えられる。そうした東アジア諸語の内、満洲語、漢語、日本語のオノマトペを比較検討することによって、満洲語、漢語、日本語間の言語接触

を考察している。決して三言語間の語系統を論ずるものではない。

一般的に擬音語、擬声語、擬態語はオノマトペと総称される。オノマトペは、直接的にはフランス語にもとづく用語だが、その語源は古代ギリシア語に遡る。オノマトペは、那須（2008）に「オノマトペには新しい語形を次々と作りだす力が備わっている。」と述べているように、非常に生産的なものである。「やま」「かわ」のような固有語に比べると、より新鮮な表現効果を求めて、つねに新しいオノマトペが作られていると言ってもいいだろう。その際に、自ら新しいオノマトペを生み出すだけでなく、他言語からの影響を受けて、新しいオノマトペが作られることもある。

そうした影響関係を明らかにするため、本論文では、まず、満洲語、漢語、日本語の、三言語におけるオノマトペの対照研究を行い、日本語のオノマトペを中心として、満和、和漢それぞれの相違点を明らかにする。そして、それにもとづきながら、東アジアにおける満洲語と漢語と日本語の言語接触について検討している。

東アジアにおける言語接触の研究としては寺村(2007)があるが、寺村（2007）は、トルコ語、モンゴル語、満洲語、韓国語、日本語などのアルタイ諸語の語彙の面における影響関係について明らかにしている。その一例をあげれば、Turk 語の「多い」という意味の tümen はモンゴル語 tüme-n、女真－満洲語 tumen（万・多い）漢語の圖們（地名・tumen）朝鮮語の逗満（地名・두만・toman）とアルタイ諸語に共通し、且つ民族の移動と共に漢語にも流入している。日本語の「味噌（Miso）」という言葉は、満洲語では「Misu」、高麗語では「密蘇（Mitsu）」であり、共通性があることが分かるという。日本語との関係も同書によれば、モンゴル語 qatamui（堅い）、女真・満洲語 katambi（水分が抜けて堅い）、日本語 katai（堅い）に各語幹に共通する現象がみられると言う。

王氏は、言語接触の研究の一例として、その多様性が日本語の特徴ともされる、オノマトペを取り上げ、論述している。例えば、王氏が採取した満洲語の darang（だらりと）などは日本語の「だらり」、「だらっと」に通じるものがあるようだ。

論文は以下の構成で執筆されている。

第一章　満文『玉堂字彙』から見た満洲語のオノマトペの諸相

本章は以下の節に分けられ構成されている。

第一節　満洲語のオノマトペの形態

第二節　満洲語「seme」「sembi」を伴うオノマトペ

第三節　満文『玉堂字彙』における語尾がb、k、ngで終わる単純形式のオノマトペ

明代末頃から中国では字書の刊行が相次ぎ、検索に便利な部種別画数引きと言う、今では当たり前であるが、当時としては画期的な字書が作られる。代表的なのが梅膺祚の『字彙』である。『玉堂字彙』は『字彙』より出典、地名などを省略したより簡便な大衆的字書の嚆矢と言えよう。

清代に入ると漢字学習の必要性を感じた、満洲族が既存の『玉堂字彙』を利用して、その満洲語バージョンを作ったようだ。それが本章の拠って立つ満洲語資料の満文『玉堂字彙』である。

この書はBibliothèque Nationale de France所蔵本の満洲語『玉堂字彙』で、本書は当該図書館以外の所蔵はない孤本である。Julius Heinrich Klaprothによりキャフタ（Кя´хта）で発見購入されている。それが彼の晩年を過ごしたフランスの図書館に入ったのであろう。

満文『玉堂字彙』は2013年1月～2017年7月にかけて寺村により満洲語のロマナイズ化、日本語への翻訳、漢語本との校訂、注釈を付けて『満洲語注音・注釈『玉堂字彙』―研究と翻刻・繙訳』として「子集」～「亥集」まで計12冊に分けて刊行されている。

王氏は3千数百ページに及ぶ同書の中から、満洲語のオノマトペの諸相を探り出したのである。

第一節において、満文『玉堂字彙』におけるオノマトペの形態的な分類に関しては、大きく「単純形式」と「双語形式」の２種類に分け、それぞれの分布状況をグラフで示す。また、後ろに、「seme」、「sembi」という日本語の「と」（「のんびりと」など）に相当するものを伴うのが、形態上の大きな特徴と見なされている。そこで、「seme」「sembi」の区別を示した上で、日本語の「と」との類似性に触れている。

第二節において、「seme」、「sembi」を伴うオノマトペを中心に、その意味分類を行い、大きく生物と無生物に分けられている。生物は、人間、動物、植物をさし、人間が発する声と音、人間の行為と様態、動物の鳴き声と音、植物の音などを描写するオノマトペである。一方、無生物は、生物以外に、生命がない物をさし、無生物には、物の他に、水および雨、風などの自然現象も含めている。

第三節において、満文『玉堂字彙』から抜き出した語尾が b, k, ng で終わる単純形式のオノマトペについて、満洲語のオノマトペの日本語訳（寺村訳）をもとにして、河内『満洲語辞典』を参考しながら、擬音と擬態という視点から再分類する。そして、唯一の先行研究である曉春（2015）「満語擬声詞刍議」の分析を参考とし、その相違点をまとめる。また、日本語オノマトペの持つ特徴と同様に、擬音語、擬態語に分類する。さらに、形態から見れば（「seme」がついている）、満洲語オノマトペと一致するが、意味としては、日本語には直訳しにくいものを、「類似オノマトペ」に下位分類している。

〈本章の評価〉

これまで満洲語のオノマトペについては、曉春（2015）が「擬音詞」に限定して扱った論文以外には、目立った論考はない。王氏は擬音語のみならず、擬態語も含めて分類、検証している。seme は満洲語 sembi の連用形で、tob seme（ぴたりと）など擬音語、擬態語に seme、sembi を伴うものが多い事に注目し、採集分類し、且つ語尾が b, k, ng で終わる擬音語、擬態語にも触れている。このように、日本語と系統関係にない満洲語のオノマトペに、日本語のオノマトペとの形態上の類似性があることを明らかにした点も重要である。

王氏はこれらの地道な作業を通じて、膨大な資料と真摯に向き合い、満洲語オノマトペの研究に一定の筋道を切り開いた。付表１～５に見られる資料の集積は、今後の王氏の研究に大いに資すると考えられる。

第二章

第二章では、『唐五代言語辞典』『詩経』における漢語のオノマトペについて、漢和比較の観点から、重言型のオノマトペを主とし、意味的な分類を行っている。そして、『詩経』における漢語のオノマトペがどれほど日本語語彙として定着されているかを確認し、受容しやすいか否かは、受容レベルで示している。

第一節は、日本古典語に見られるオノマトペが当時広く流通していたと考えられる中古漢語の語彙が日本古典語のオノマトペに影響を与えたのではないかという視点からの基礎研究である。漢語には、「象声詞」という日本語の擬音語、又は狭義の擬声語に相当するものがあるが、擬態という概念が存在していない。しかし、日本語の擬態語に相当するものが、ないというわけではない。これまで行われてきた研究は、主に現代語を対象としており、中世・近代漢語を対象とした研究は少ない。前半は、擬態語を中心とした意味的な分類を行うことによって、唐代に見られる漢語のオノマトペの基礎研究を試みている。後半は、和漢比較の観点から、重言型のオノマトペを検討している。

第二節においては、中国の最も古い詩集である『詩経』にみられる漢語オノマトペについて、その意味分類を行う。形態に関しては、畳韻連語（「窈窕」など）、双声連語（「参差」など）、「若」がつく形（「沃若」など）の３つのタイプがみられるが、「悠悠」「囂囂」「滔滔」などのような重言型が最も多く、日本文学作品における使用例も多数ある。『詩経』３１０篇にあるすべてのオノマトペをまず擬音語と擬態語に分け、それぞれ、動物、植物、人間、非生物（モノ）、自然現象、抽象的なものなどに下位分類する。『詩経』における漢語の重言型のオノマトペが多数確認できたため、動物、植物、人間、非生物（モノ）、自然現象、そして、程度を表す抽象的なものを、逐語的に分析し、受容レベルを確認している。

第三節においては、植物を対象とした漢語オノマトペについて検討する。擬音語と擬態語を分け、植物の種類にしたがって分類する。受容レベルを確認した上で、日本語としてもっとも定着しやすい漢語のオノマトペを収集している。

第四節においては、人間を対象とした漢語のオノマトペについて検討する。動物と植物と異なり、人間の様子と人間の心理状態をさらに下位分類している。

そして、第五節においては、非生物を対象とした漢語のオノマトペについて、第六節においては、風や雷といった自然現象を対象とした漢語のオノマトペについて、第七節においては、程度を表す抽象的なものを対象とした漢語のオノマトペについて検討している。

〈本章の評価〉

漢語と日本語が古くから接触してきたことは周知の事実ではあるが、漢語から、どの時期に、何が、どのように、どれぐらい日本語に影響を与えたかということはまだまだ研究の余地がある。本論文では、伝来した漢籍の中でも特に日本文学に影響を与えたものの一つである『詩経』を選び、どのようなオノマトペが日本人によって使用されたかを文献での用例をあげて示すとともに、文献のジャンルや時代から、そのオノマトペの日本語における定着度を示しており、この日本語における定着度を示した付表７には資料的な価値もある。

『唐五代言語辞典』と『詩経』と言う一見関連性のない資料の選択は、前者が奈良時代の官僚たちの学習漢語が中世漢語であった事、後者は教養知識としての四書五経の中で文学性が高い資料として選んだことによるものと考えられる。ただ、『詩経』にあって日本語に取り入れられたものとそうでないものがはっきりしたが、残念な事に、それぞれの理由が書き込まれていない。理由は個別的で、傾向を出すのは難しいかもしれないが、付表６及び付表７を駆使して今後の王氏の課題として解決を目指して欲しい。

第三章

第三章では、奈良時代を代表する日本文学作品である『萬葉集』における古語のオノマトペについて検討している。日本語で、最も古いオノマトペは、『古事記』にみられる。『萬葉集』にも「ゆら」「ゆた」「さや」といったAB型の古語オノマトペを確認し、『萬葉集』全四巻・4516首の和歌から、オノマトペを収集し、その意味分類を行っている。

第一節においては、『萬葉集』におけるAB型の擬態語について検討し、主に「こご」「ほろ」「ゆた」「しの」「さや」の五語を中心に取り上げている。『全訳古語辞典』『角川古語大辞典』『日本国語大辞典』

から意味を確認し、各語を含む単語群を表で示している。たとえば、「こご」の単語群は「こごふ」「こごし」「こごる」「こごむ」「こごなる」であるが、そのうち、「こごし」をとりあげ、「こご」との差異について検討している。また、同様に、「ゆた」と「たゆた」、「しの」と「しのの」、「さや」と「さやさや」の差異についても検討している。

第二節においては、『萬葉集』における AB 型の擬音語について検討する。主に「そよ」「とど」「ひし」「ゆら」の４語を中心に、それぞれの意味、派生した単語を確認している。また、第一節と同様に、「ゆら」に似ている ABB 型の「ゆらら」との差異について検討している。

〈本章の評価〉

奈良時代は官僚、僧侶を中心に、漢語が用いられていたと考えられる。仮説ではあるが日本語にオノマトペが多様である一つの原因として、その漢語の影響が指摘されている。王氏はその前段階である、『萬葉集』のおけるオノマトペの実態分析をしている。王氏の結論は概ね妥当と考えるが、今後は付表８に示された資料を駆使して、日本古典語における漢語由来のオノマトペの研究に進んで欲しい。

最後に、あらためて、本論文において特に評価すべき点を２点あげておく。まず一つは、満洲語を研究対象としてとりあげた点である。満洲語については、文法に関しても語彙に関しても研究が少ないが、オノマトペに関する研究はほとんどなく、さらに日本語と関係づけての研究となると皆無である。そのような未開拓の領域を切り開いた点において、王氏の論文は高く評価されるものである。そして、もう一つは、オノマトペという観点から中国語と日本語との言語接触について検討した点である。中国語と日本語との言語接触に関する研究はこれまでも存在したが、オノマトペに関するものはほとんどなかった。それをとりあげ中国語と日本語との関係に新たな光をあてた点も評価すべき点である。

３．結論

以上の審査内容、評価に基づき、本論文を審査対象とする学位論文審査委員会は、全員一致をもって、本論文は博士（日本言語文化学）の学位を授与するに値するものと判断し、ここに報告する。

以　上